



TITLE:

<批評・紹介>支那史學に現はれたる倫理思想 神田喜一郎著

AUTHOR(S):

小畑, 龍雄

---

CITATION:

小畑, 龍雄. <批評・紹介>支那史學に現はれたる倫理思想 神田喜一郎著. 東洋史研究 1942, 6(6): 466-467

ISSUE DATE:

1942-02-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145756>

RIGHT:

代カトリックの部分はやはり感心しないが、元代以前の部分は他の二書よりはよく、この類の書によく見うけられる奇矯な言説にあまり惑はされてゐない點で、この著者の批判的態度を買ふべきであらう。

〔藤枝光〕

## 支那史學に現はれたる

### 倫理思想

神田喜一郎著

岩波講座倫理學第十冊

この論文は二部分から成る。

一、「支那史學の倫理的 성격」では、先づ史通を引いて、史學の目的と效用とは事實を直書して勸誡に資することであり、此は支那史學の根本理念であるとされる。そしてこのことを正史の忠義傳、孝友傳、列女傳等、またはそれと對立する姦臣傳等によつて立證されるのである。

この場合、勿論時代によつて思想の推移することを認められ、例へば忠義傳を見ると、晉書では、忠義の士とは一般に節義を守つた者を指すが、宋史では、君臣間の節義を守つた者となり、また唐以前の諸史には孝友傳が忠義傳の前にあるが、以後の諸史ではその反對であること

などを指摘して、それは唐宋以來帝王の權威が強くなつて來た思想上の變化を示してゐる、と説かれる如きである。正史のみではなく、漢紀、資治通鑑などもこの勸善懲惡を目的とするもので、それが朱子の通鑑綱目に至つて徹底する。

然らばこの支那史學の倫理的 성격は如何にして生ずるかと云へば、それは支那の史學が春秋から發足することに由來する。大義名分を正すといふ孔子の理念が春秋の根本理念であり、そこから正邪善惡に對する褒貶が生ずる。従つて春秋を理想とする司馬遷の史記、それに續く諸史に於ては、一つの獨立した専門の史學として認められるに至つた後、遂に春秋學の囿絆から解放されず、春秋學の實踐的目的性の支配を免れ得なかつた。

以上が前半の大意であるが、支那史學の倫理的 성격としてその勸誡主義を捉へ一貫して展開された論旨は明晰である。然し春秋は國家、社會、天道との關聯に於て記されてゐるのに、史記以下には個人の言行が著しく前面に浮び出てくる。その變化は如何に説明すべきか、全く不明である。これは單に形式だけの問題で

はない。その説明として、左傳、國語、戰國策について一言を費すべきであつたと思ふ。ともに大義名分（この意味も充分明かではない）をあらはすことに變りはないとしても、そのあらはし方に變りがあることが注意せられてよいであらう。また忠義傳、孝友傳は晉書、宋書以後設けられたが、その理由も述べてほしかつた。もつとも金井之忠氏著「唐代の史學思想」には、少し説明してある。

二、「正統論」は四千年間に代興せる諸王朝の正閏に關する議論の展望である。これはたしかに支那史學に顯著にあらはれる倫理思想である。はじめて秦を即位として帝統に正閏を區別した張蒼の説、その他五德の運の相承による正統論、魏吳蜀三國についての陳壽、習鑿齒、劉知幾等の正統論、東晉、元魏についての皇甫湜の正統論、また五代の梁に關する李昉、薛居正、歐陽修、章望之、蘇軾の正統論、それらが次々に唱へられ、朱子の通鑑綱目に至つて結論に到達する經過がその思想的政治的背景とともに、要領よく述べられてゐる。然らば、かゝる正統論が支那史學界に大問題として常に繰返

されたのは何故であるか。それは全く支那史學の倫理的性格がこゝに至らしめ、最後に朱子の正統論の如き道德主義に歸結したのであると説かれる。かくしてこの論文の前半と後半とが結び付けられる。けれども支那史學の倫理的性格として説かれる勸誡主義のみから正統論を理解することは困難であらう。國家についての倫理思想を考へねばならぬであらう。

本論文は重要な中心問題を捉へて、それより逸することなく、極めて要領よくまとめられてゐる。しかしそのために、書かれてゐる限りでは論旨が明かであるけれども、まだ問題の中核に何か残つてゐるやうである。

### 近世支那の倫理思想

吉川幸次郎著

岩波講座倫理學第十二冊

この論文を読む前に、題目を見て二つの豫想をした。第一は近世支那とは、唐の中頃から轉換期に入り北宋に完成されたと考へられるだらうといふこと、第二に、その倫理思想とは、近世の社會から

生み出され、そこに生きてゐた倫理思想のこと、具體的には、國家倫理、家族倫理の觀念が如何なる内容を持つたか、また個人や社會を如何に考へたか、さういふことが述べてあるのだらうと豫想した。が實は第一の豫想は當つたけれども第二の豫想ははつれた。

近世を唐の中頃以後、阿片戰爭頃までと考へることは、定説ではないけれども有力な説である。この時期の倫理思想として、著者の取上げられたのは、「經」への復歸、といふ思想である。何故この思想が起つたのか、といへば、中世の生活に混亂があつたから、と説かれる。つまり中世の生活の混亂は政治の混亂を反映したもので、その混亂を救ふためには、混亂以前の古代の生活に復歸するがよいと考へられ、そこに「經」への復歸が求められる、といはれる。巧妙な説明であるが、近世社會を特徴づける市民の進出といふ現象と「經」への復歸の要求の發生との關係はわからない。かくして最も古いものを最も倫理的だとする思想に一定し、「經」への復歸が近世の倫理として確立した。

しかしそれは、古代の生活と今の生活を合致させることは不可能だから、意識的無意識的に現實と調和するものであつた。それは「道學」に於て最もよく見られる。朱子の思想は「經」の再現であり、しかも「經」そのまゝの再現ではない。現實との調和による變更を自覺しつつも、「經」の重要な點を中世の隱微から再び明かにしたところに、復歸の意識の満足がある。かくして朱子學が近世の學問の正統となつた。

この「經」への復歸といふ思想は何故近世を貫く倫理となつたか。それは近世の社會に適するから、と説かれる。官僚を市民から選ぶ科擧の制度と結びついてゐるからである。中世の煩瑣な倫理にかはつて「經」が市民の知識階級の倫理となつた。しかも「讀書の家」の固定とともに、近世の倫理は安定した。つまり、近世の倫理は、市民の進出といふことからではなく、中世の生活混亂の自覺から起つたのであるが、それがこの近世社會に適したのである、と云はれるやうである。

その近世の倫理は、倫理としての力を